
刹那の憩い

水森都月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

刹那の憩い

【Zコード】

N7135S

【作者名】

水森都月

【あらすじ】

アナはアルシャナ王国の王都で治安部隊の一員として働いていた。個性的な仲間と共に過ごす、過酷な運命の中の短い短い憩いの日々。

まだ連載していないファンタジー小説の番外編です。ですが、この作品だけでも読めるようになっています。

淡黄色たんじょういろが少女を見つめる。鏡の中の？彼女？は不安げに揺れる二つの瞳から片時も目を離さず、辛そうに眉間にしわを寄せていた。不健康なほどの肌の白さが、癖が全く見られない滑らかな漆黒の髪で強調されている。形のよい小さな唇は色あせ、小刻みに震えていた。

ほう、と息を吐いて瞼まぶたを閉じる。

「わたしはアナ、今日も私はアナ……」

少女は周りの空気が湖面の水のように穏やかに張り詰めるまで深呼吸を繰り返す。しばらくしてから瞼を開け再び視線を鏡へと向ける。

そこには先ほどまでは違つて薔薇色の頬と唇をした、幼く、年相応のあどけなさを残した少女が瞳を輝かせて勝気に笑っていた。

「大丈夫。？わたし？は今日もアナだ」

儚げな雰囲気は消えうせ、笑みは深まってゆくばかり。少女は鏡の中の自分の顔をなぞると、透明なその金色をひたと見据えた。

「今この時を楽しんで、ね？」

少女に向かつて呟くと、腰まで届く髪の毛を櫛でさつと梳き、立ち上がる。傍らに置いておいた通常より少々軽めの長剣を手にとり、部屋を飛び出して勢いよく階段を駆け下りて行った。

夜の世界はまだ完全に抜け気つておらず、太陽煌めく時間なら白く輝くその街は今、儂くも幻想的な青で包まれていた。清々しい雰囲気が朝の王都アナクールの街全体に漂つていて、人々が始動する前の静けさがなんとも心地よくアナを覆う。

誰もいない静かで美しい街にブーツの足音が明快に響く。しつとりと水分を含んだ空気はアナの体にまとわりつき、爽やかな清風がそれをぬぐう。早朝を十一分に感じさせる空気の中、柔らかな微笑を浮かべながら歩く少女の足取りは軽かつた。

壁と同じ色をした石畳の通りを小鳥の轡り（さかづき）を聞きながら少女が進んでいると、十数メートル先の角から少年が現れた。こぢらに気づかず同じ方向へと向かっている。

少女はその大ぶりのメイスを背中に括りつけていた、透明感のある赤茶色の髪の少年を知っていた。

「ヴァレンタインさん！」

今にも見えなくなってしまいそうにずんずんと歩いている姿にそう叫ぶと共に、駆け出す。左腰に携えた長剣が重いのか、心なしかその体は左に傾いている。少しばかり息を乱しながら長い坂を上りきり、少年に向かつてありつたけの声で叫んだ。

「待つて！ ヴァレンタインさん！」

随分と距離が縮まつてから自分を呼ぶ声に気がついたのか、立ち止まつて少年はゆつたりと振り返つた。

「おう、アナ。はえな、散歩か？」

にせりと笑つて言うヴァレンタインの向かいに立つと、少女は息を整えてから否定する。

「違うわ、仕事。帶剣している制服だって着ているの」といふを

うしたらそう見えるの？ 今日から昼に戻ったの」

少し呆れた表情で少女が言つ。ヴァレンタインはアナのきつちりとした姿を上から下へと時間をかけて見てから、ボタンを外すなどして着崩された自分の制服を一瞥した。ああ、と頷き屈託なく笑う。そして唐突に向きを変えて歩き出した。

「今まで夜番だったもんな」

急に歩き出した少年に置いていかれないよう早足で少女は進む。「夜もやつぱり大変だつたわ。お酒を飲んで暴れまわるおじさんたちが多くて。深夜は静かだと思ったら物取りが起こつちやうし、女人の悲鳴が聞こえてきたり……」

そこまで言つて少女は口をつぐむ。苦悶にゆがむその表情を知つてか知らずか、能天気にヴァレンタインは言つた。

「まあ、どつちもどつちだよな。昼も喧嘩や物取りはあるし、平気で殺人とか起こるだろ？ まあ、仕事終わりに酒が飲めっから、俺は夜より昼の方が好きなんだけだな」

少年が笑つて言つた言葉に、長いため息を吐き出してから少女は答えた。

「酒が飲めるか飲めないかで仕事の好き嫌いを決めていいの？」

「いいんだよ。俺の生活は酒と喧嘩で回つてんだ」

高らかに断言してからうれしそうに笑い出す。

「昨日飲んだ酒がすごくうまかったんだよなあ。酒屋の兄ちゃんがこつそり出してくれたんだけどさ、口当たりが良いんだよ！ 六瓶開けちまつたもんだから、その後高い金ふっかけられたんだけど。それも銀貨六枚！ 一本辺り銀貨一枚なんだつてよ。一緒に飲んでたレイントと殴り合いになつちました」

銀貨六枚あれば王都で一週間は食いもんと寝る場所に困んねえよなあ、とそう言いながらもヴァレンタインはからりと笑う。

「ヴァレンタインさん、レイントさんと何歳年が離れてると思ってるの？ いい大人と何やつてるのよ……」 げんなりしたアナに向かい、指折つて数を数えながらヴァレンタインはしゃべる。別段彼

女の反応を気にするでもなく。

「俺が十六でレインントが二十八だから……十一歳差だな。まあ、喧嘩しながらお互い楽しくなって、その後別の酒屋に行つて飲みなおした。疲れた体にはやっぱ酒は沁みるな。口ん中切つたみたいで痛かつたけど」

「……ヴァレンタインさんが夜番から外されている理由が、改めてよくわかった気がする。前に聞かされたときは嘘だと思ったけど、本当にこれじゃあ、仕事にならないものね」

呆れを通り越して笑うしかない状況に少女は、朝から疲れた様子を見せたものの、少年は本当に生き生きと琥珀色の瞳を輝かせていた。

「喧嘩は好きだ。殴つて殴られてのあの感じがたまらなく好きなんだよなあ。戦闘みたいにやるかやられるかの世界だし、強え方が勝つ。わかりやすくて簡単だ」

口角を上げてにたりと笑う。

「だから誰かと戦うことも好きなの?」

「ああ。戦つてるとなんだか、こり……血が騒ぐ? だっけ? そんな感じになるんだ。なんかわくわくすんだよなあ。自然とうれしくなつて闘いたくなつちまう」

ヴァレンタインは上機嫌に言つた。くるりとこちらに体を向け、後ろ歩きで坂を進む。その顔は欲しいものを今にも手に入れられる寸前の、子供のような笑顔を湛えていた。

「手合わせしてくんねえかな」

「誰が?」

「アナ」

「わたし?」

細くすつとした人差し指を自分自身に向けて驚くアナに、ヴァレンタインはこくりと頷くとからりと笑つた。

「俺、お前とまだ手合わせしてなかつた」

しばしの沈黙の後、アナはふるふると顔を横に振つた。

「無理よ。メイスと剣とじゃ勝負にならないわ」

それでも少年は譲らない。

「じゃあ、俺も剣を使つ。剣と剣の戦いだ。どうだ？ これなら対等だろ？」

「力が違うわ。わたしはまだ子供だし、ヴァレンタインさんの怪力に押されてしまう。勝負は始まる前から決まつている」

「力ならお前の技術で十分補えるだろ？」

「どうしてもヴァレンタインさん、無理よ。体格差、スピード、筋力、どれをとってもわたしは劣つていてるわ。いくらわたしの剣が普通のものより少し軽くて扱いやすいからって、無理なものは無理よ。手合させできたとしても、わたしがもう少し大きくなつてから。今は無理なの。わかつて」

ヴァレンタインはすっかり押し黙り、体を進行方向へと向けなおす。アナがほつとした表情を見せたのも束の間、少年の問いに少女は一瞬きょとんとする。

「アナ、お前何歳？」

少年の問いの意図がわからず、思わず立ち止まつた。アナの行動につられるようにして、少年も立ち止まる。頭二つくらい高い位置にある精悍な顔をアナに向か、少し真剣にもつ一度問う。

「年、いくつだ？」

「え……十四だけど」

途端に、十四かあ、といくらか間の抜けた声が響く。そしてまた唐突に歩き始めた。アナは置いてきぼりをくらう。

「……え、何？ 何よ！ ヴァレンタインさん説明くらいして！」

しばらく呆然としてから我に返つて、少女は小さくなつた少年の背中を追つた。

アナがヴァレンタインを追つて曲がった角の先には、四階建てのこぢんまりとした白い建物が建つていて。少年に続く形で、少女はその建物の中に吸い込まれてゆく。

正面入り口の上には大きな文字で『王都治安部隊西支部』と書か

れていた。

「あーー！ どつかに強えやついねーかなー」

いきなり隣から呼ばれた言葉に少女は苦笑する。

「仕事中よ」

「わかつてゐる。ナビにつどにどんな強えやつがいつかわからんねえだろ？ 治安隊にも強えやつはいるけど、そういうやつらとはもう手合わせしちまつたし。大半はあんま強くなかつたし」

不満を素直に表に出した顔でぼやぐ。後頭部に両手を当てて歩くさまが、普通の少年のように感じられた。

アナは『白の街』とも呼ばれるほど白一色の街全体を、静止画のように細部にまで気を配りつつ捉えながら、耳で田の前に広がる市場の喧騒を聞いていた。

「ただ街の治安を守るために巡回するなんてつまんねえ。どつかで喧嘩でも起こりんねえかな。 おっちゃん、林檎一つも「らうぜ」

店先に大量においてあつた赤々と熟した果実を手に取ると、慣れた動作で口に運ぶ。張りのある瑞々しい咀嚼の音が、小ぶりなアナの耳にも心地よく入る。

と同時に果物屋の男が苦笑いした。

「またかい兄ちゃん。いい加減金持つてきてから買えよ」

「悪いな、今夜の酒代も危ついんだ。今は勘弁」

悪びれもなく食べ進める姿をあきらめた様子でアナが見ていると、ぱちりとピントが合つたように彼女は果物屋と目が合つた。にっこりと笑いながら、アナにヴァレンタインが食べているそれと同じものを投げてくる。

落としそうにななりながらも何とか受け取ると、アナは困った子犬のように小首をかしげる。

「嬢ちゃんも食べなよ。兄ちゃん宛に西支部につけとくからや」

笑つて言つ男にアナは微笑む。その姿はまだまだ子供なのに、雰囲気は落ち着いた女性を髪髪させた。

「ありがとう。でも、お金は持つてゐるから払つわ。ヴァレンタインさんが食べてるのも」

「おっ、マジで？ ありがとな！」

今まで我聞せずといった風に黙つていたヴァレンタインだが、その言葉を聴いてうれしそうに顔を綻ばせる。おもむろにアナが財布を取り出すと、硬貨がぶつかる音がした。

「おじさん、いくら？」

一瞬躊躇つてから、男は思い切つて言つた。

「青銅貨八枚！」

「え、……安すぎない？ 普通はアヴィル青銅貨一枚くらいでしょう？」

アナは呆けてすぐに反応できなかつた。

アヴィル青銅貨は青銅貨より価値が高く、一枚で青銅貨十枚と同等の価値になる。アナクールでは林檎一つでアヴィル青銅貨一枚が相場。なので、本来林檎二つはアヴィル青銅貨一枚が通常なのだ。

心配そうに問う言葉に果物屋は豪快に笑つた。

「いいのいいの、嬢ちゃんは可愛いから。その可愛さに免じて一つはタダ。もう一つも嬢ちゃんの気前のように免じて、青銅貨一枚値引きだよ。おじさんの気が変わらないうちに早く払つちゃいなよ」

そういうと男はアナを手招きして自分に近寄らせた。そしてその財布から赤銅色の小さな硬貨を八枚取り出す。

「いいの？」

男の手に渡つたそれを躊躇いがちに見ながらアナは再度確認した。

「どうつてことはないよ、上さんにしかられるだけだから」

またいらつしゃいと手を振る男をしばらく見ていたが、アナは仕方無しにヴァレンタインの元へと戻る。退屈そうにあくびをしていた少年にアナが目配せをすると、なぜだかヴァレンタインは人懐っこい笑顔を浮かべた。

巡回を再開してからもアナは果物屋が気がかりな様子で、幾度となく振り返った。男は特にこちらのことを気にした様子は見せずに、街に溢れるお客様に声をかけている。

「そんなに気にすんなよ。果物屋のおっちゃんがいって言つたんだからわ」

「いいの？ 商売上がつたりじゃないの？」

「いいんじゃねえか。なかなか繁盛してるみたいだし」

さらりと言つヴァレンタインを不服そうにアナは見ていた。

「それに、王都は何でもかんでも物価が高えし。林檎なんて俺の故郷だったら一つ青銅貨五枚で買えるな」

少年がその後続けた言葉にアナは目を丸くした。

「そんなに安いの林檎つて……」

「ああ、エンペイル一口、あ、俺の故郷な。林檎栽培が盛んなんだ。山も森も近いから野生の林檎だつて簡単に見つかる。野生の林檎は癖が強えが、信じられないくらいうまいんだよ。昔は金なんか払わなくたつて好きなだけ食べられたから、金払う気も失せるんだよなあ。……何だよアナ。そんなに驚くことか？」

ヴァレンタインはアナの方を見ておかしそうに笑つた。どうやら本来林檎が安いものだと知らなかつたということが、不思議でならないらしい。

アナはしばらく押し黙つていたが、口を開いた。

「わたしの故郷ではまともな食べ物が見つかること自体珍しかつたから……」

「ん？ なんか言つたか？」

少年は眉を寄せるようにしていぶかしむ。肩を落として寂しそうな笑みをアナは浮かべていたが、深く深呼吸すると輝かんばかりに笑つた。

「ヴァレンタインさん、朝」はんまだよね？」

「ん、あ……ああ」

一瞬戸惑いを浮かべてから少年は答えた。

「わたし奢る。何か食べたいものある?」

「うおお! マジか! ほんとに奢ってくれんのか? 悪いな! いいぞいいぞ、そこはアナの好きなもんで。あ、けど辛いもんはなしな。体に合わねえんだ」

「わかつて。この前食べた南の方の料理がおいしかったから、その店でいい?」

「辛くなくてうまければどこの料理でも大歓迎だ!」

あからさまに食事代が浮きおいしいものにありつけることにうれしがるヴァレンタインを少女はくすぐすと笑いながらも、丁寧に礼をした。

「改めて今日からよろしくお願ひします」

「おう、よろしく頼むな!」

少女がにっこりと笑うと、少年も満面の笑みで笑い返した。

「お帰りお一人さん、『レイン』は楽しかったかー」

僕、一人が午前中の巡回終了のため西支部の一階、一人が所属する隊の休憩所に戻つてくると、同じ隊の先輩隊員であるレインが笑顔で出迎えた。縮れたこげ茶色の髪の毛を無造作に搔くと、ソファにだらりと座りなおす。

「仕事って言つて仕事って」

「ん？ ありや仕事にかこつけての『レイン』だろ」
アナが見るからに迷惑そうにしている隣で、何ともなかつたかのよつにヴァレンタインはレインの姿を見てすぐに、嬉々として叫んだ。

「レイントー 酒屋行こうぜー！」

煩わしげにヴァレンタインを見やつてから、レイントはアナに向かつて咳く。

「こなんなんとうまくやつてるのなんて、オレらへらいだぞ」
アナはヴァレンタインを横目で見た。すると、琥珀色としつかりかち合う。しかし少年は先ほどのレインの言葉に気がつかなかつた様子で、ただただ笑つてゐる。

ヴァレンタインは生まれつき耳が悪く、小さい音が聞き取れないことがしばしばある。遠くからの呼び声や咳き声が聞こえないとすることが多い。

少女は視線をレイントに移すと、今日何度したかわからない苦笑いで答えた。レイントはそんな少女の表情を見て、思わずため息をつく。

「アナの答えが曖昧だからできてるんじゃないかつて尊されてるんだぞ。それがヴァレンに気があるんじやないかつて」

アナは気があると聞いた瞬間不機嫌な顔になつた。整つた眉の片

方を上げ、につこりとした笑みを浮かべてレインントの向かいのソファに座わり、彼のはしばみ色の瞳をじっと見つめる。これはほとんど話し合う余地がありそうだと思ったときのアナの癖だ。

レインントは頬を引きつらせて笑った。

「なあ、酒屋行かねえのか？」

そんな雰囲気を知つてかしらすか、ヴァレンタインは再度問う。「今からアナとお話しなんだよ、お話し。……てか、お前は気にならないのか？」

「ん？……ああ」

ちらりとアナのほうに視線を移してから、妙に冷めた調子で言葉を紡いだ。

「気になんねえよ、別に。誰が誰を好きだらつと個人の自由だし。

……それより飯と酒だろ」

ヴァレンタインは憂い表情で一瞬メイスの刃先に軽く触れてから、レインントへと期待のまなざしを向けた。

「夜までは仕事中だ、我慢しろ。そこからへんにせつを買つて来たハイがあるだらうから好きに食えよ」

投げやりに後ろの机を指す。

「よつしゃ！ 全部食つていいのか？」

「……好きにしろよ」

「今日はすゞしつこてるな。飯は齧つてもらうしパイは食べられるし」

ぐるりと背中を向けパイを探し始めるヴァレンタインをよれに、レインントはアナに間抜けな表情を向けていた。

「アナ……」

「何？」

「飯齧つたのか、ヴァレンタインに」

「ええ、齧つたわ」

「他になんか齧つたか？」

「他は林檎くらい」

レインントはゆっくりと横になつた。顔を天井に向け手を額に当てて、バカと呟く。

「なんか言つたか？」

「言つてねーよ。お前はさっさとパイでも食つてろ」

「もう食つてる」

背中のメイスを揺らしながら見つかったパイにかじりつ少年に、もう一度ため息をついた。

「……年下の女の子に奢つてもらつて、お前にハライドはないのかプライドは」

がばりと起き上がりアナの瞳をじっと見る。

「で、アナはあいつに惚れtenのか？」

「な、何でそういう結果になるのよ！　ただご飯を奢つただけじゃない！」

顔を真つ赤に染めて狼狽する少女に、泰然とレインントは言つた。
「いや、アナみたいなしつかりしてる子つて……意外にもあんまり惚れやすくて尽くしちゃうつて言うからさ。あればだめだ。今までの貯え全部酒に持つてかれるぞ。家計が酒で破綻する」

普段しまりのない顔が、真面目に話しだす。戸惑い気味に目線を落しながらも、アナは言つ。

「違うわよ、惚れてなんかいない。……ただちょっと、ええっと……なんていうのかしら？」

「……わかった。言わなくていい。オレはわかった」

明らかに何かを勘違いしている様子のレインントだったが、アナは答える必要がなくなつたからか見るからに安堵した。

矢継ぎ早にレインントが質問する。

「あいつの家の家賃払つてやううとか、これから酒代は面倒見てやううとか、そんなことは思つていらないんだよな？」

「……なんでそななるのよ。そんなことこれっぽつとも思つてない。わたしは気持ちと時間と懐に余裕のある貴族の奥方様じやない。ただの子供。なのこじうして少ない稼ぎの中でそんなことができるの

よ？」

綺麗な顔でアナはレイントを睨みつけた。レイントはなんとも情けない表情を浮かべた。

「冗談だよ冗談。……なんとなくだけど、アナの実家が援助してくれるんじゃないかなあとか」

「思つたわけね」

「そつそう」

「氣を取り直したようにこいつとレイントは笑う。アナはこめかみに手を添えながら、低い声で答えた。

「裕福な家庭の娘がわざわざ薄給の、しかも時によつては危険な治安隊の仕事に就くと思つ？」

「……」

「氣まずそうに黙つたままのレイントに、アナは肩の力を抜くとふわりと笑いかけた。

「まあ、そういうこと」

いつもの調子に戻つたアナに対し、レイントは聞こえるか聞こえないか位の声で呟いた。

「じゃあ、惚れてはいないわけね」

「……そんなわけないじゃない」

きつぱりとアナは断言した。

「わたし、ヴァレンタインをこのことは好きだけど、仲間としてだもの」

「俺も仲間としてだな」

いきなり振つてきた声にびくりと肩を大きく震わせ、ゆつくりと振り返つてアナは声の主を見る。

「……もうパイは食べ終わつたの？」

「ああ！ すっげえうまかつた！」

「当然だろ。オレが何ヶ月もかけて地道にアナクール内全てのパイ屋並びにパイを置いてある店を訪れ、選びに選んで、吟味に吟味を繰り返して選んだんだからな。味、食感、材料、形、全てが一番の

「パイ！ うますぎて激烈に頬が痛くなる！ 」の前食べた果物のパイもよかつたけど、やつぱりこっちの……」

鼻高々といった様子で饒舌にパイを語る。彼は食べ物の中で特にパイが好きな男だったのだ。

そんな会話が繰り広げられる傍では、幾人の人がせわしなく行き来している。怒鳴るような声が聞こえたかと思うと、ふつぶつと呟くような声が聞こえた。

「何だ？ レイント、何か知ってるか？」

ヴァレンタインがレイントに言つた。自分の話を中断されるように質問されたことにぶすりとした表情を浮かべ、少々ふつきりうつに答える。

「ああ、会議だろ。ちょうど上の階で、最近起つてる連續窃盗事件の対策を練つてるらしいんだ」

アナの眉がひそめられた。

「例の、殺人も厭わないって事件？」

その時、どことなく緊張した雰囲気をまとつて、黒髪の美丈夫が入ってきた。三人の上官の証である深緑色の制服を着ていて、眼鏡を掛けた顔はやや青白い。

「ここにいるのはお前らだけか

淡々と言葉を紡ぐ。感情を含まない、けれど命令しなれたその一言で場の空気ががらりと変わつた。どことなく緊張感が漂う。

「オレらだけですけど、何か？」

「すぐに他の隊員を呼んで来い。命令が出た。今から作戦会議だ」アナは顔つきが険しくなり、レイントは面倒くさそうに頭をかく。ヴァレンタインだけは心なしか目を輝かせている。

西支部の中でもアナたちが所属する第三隊は仕事をさせればその成功率は高い。だがその反面荒くれ者も多く、破損物を大量に生産したりと問題も多々起こしている。なので上層部からは疎まれている部分があるのだ。ただでさえ治安が悪い地域に余計な仕事は増やしたくはないといつ上の意思で、第三隊は出動機会が少なく一人一

組での見回りが主な任だ。西支部は第三隊以外に強く優秀な部隊を一つも抱えている。第三隊に仕事が来るのはめったになかった。だのに、その隊にわざわざ命令が出るということは相手が相当な手練てだれである可能性が高い、もしくはそうだといつことだ。

それを瞬時に理解した三者三様の反応であった。

命令を下したにも関わらず誰も動かないためか美丈夫は一番近くにいたヴァレンタインに顎で、行けと示す。

「あー……はい。けど、俺みんながどこにいるか知らねえ」

少し困ったように視線をさまよわせてから、そう返事が返つてくれる。

「アナ」

「わたしも、皆がどこにいるのかわからないです」

「レイン」

レイントは肩をすくめるに留めた。

一瞬眉を寄せてから、美丈夫は踵きびすを返し部屋を出て行く。その後姿を見ながらレイントは呟いた。

「いつまでたつても慣れねえよ、エメ隊長には」

ドッと疲れたようになだれる。

「下町根性持つてる俺らには、？孤高？つて感じの隊長は合わねえんだよな」

「あの雰囲気威厳あるけど、同時に緊張しちまうから」

「そう言つてるけど、時期副隊長候補だらレイントは」

「……出世したくなー」

苦笑しあう一人の傍らで、アナだけは、エメが消えた先を瞳を揺らして見続けていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7135s/>

刹那の憩い

2011年5月15日10時10分発行